

## 謹 弔

次の会員がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

亀 田 五 郎 氏	下関市医師会	12 月 23 日	享 年 100
岡 澤 寛 氏	防府医師会	12 月 26 日	享 年 81
松 田 光 男 氏	防府医師会	1 月 5 日	享 年 62

## 編 集 後 記

ボクシングのリングドクターを担当することになり、平成 22 年 11 月、上関町で開かれた全日本アマチュアボクシング選手権に出かけて行った。私は脳を守るのが仕事なので、ボクシングはお勧めでないスポーツである。初めて、生で、それもリングサイドで観ることになった。試合開始のゴングと同時にいきなり頭部顔面を叩き合い、それが三分間続いた。こちらは脳が壊れるのではないかとハラハラして、三分間がこの上なく長く感じられた。

切れた目尻に軟膏を塗るシーンをテレビで見たことがあるが、アマチュアの試合では、リングドクターはガーゼで血を拭き、傷口を見て試合続行の可否を判断するだけで、選手はあるがままで試合をしなければならない。幸いにして、試合が途中で終わる程の出血はなかった。

選手が突然、腰砕けになって尻餅をついた。相手のパンチが強く当たり脳震盪を起こしてダウンしたのだ。アマチュアでは、ダウンのポイントは有効打と同じ一点であり、ダウンを狙わなくても良いように脳を守るルールになっている。この点は安心した。しかし、プロになるとダウンを狙われるので、長くやっているうちに少しずつ軸索が切れて、パンチドランカーという認知症にも似た症状が出たりする。

試合開始の合図で、レフェリーが「ボックス」と言う。このボックスは「ボクシングをする」ことである。握りしめた拳が箱（＝ボックス）の形をしており、拳で戦うのでボクシングと言うそうだ。大昔には裸の拳で戦い、死人が出ていた残虐ショーの時代があった。現在は衝撃を和らげるグローブを装着することによってスポーツとして成立している。

それにしても、プロを目指さないアマチュアがなぜこんなにも叩き合うのか。「とにかく、勝ちたい」らしい。アマチュアはヘッドギアをつけているが、外して素顔を見せたとき、皆一様に目が輝いていたのは印象的であった。

圧倒的に強い選手が一人いた。ラウンド間で他の選手は椅子に腰掛けていたが、平然としてずっと立っていた。オリンピック金メダルに続いて、7年後、疑問判定による再戦で世界チャンピオンになった村田諒太選手である。当時からすごかった。

（理事 山下 哲男）